AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2018.7) 平成29年度:39.

「転倒・転落リスク状態」看護診断別標準看護計画の検討

横井 由紀子, 舘川 香奈枝, 浅利 尚子, 澤田 裕子, 久保 千夏, 金田 豊子

「転倒・転落リスク状態」看護診断別標準看護計画の検討

旭川医科大学病院　看護部
○横井由紀子、舘川香奈枝　浅利尚子　澤田裕子　久保千夏　金田豊子

【はじめに】
A病院の平成２７年度看護診断別標準看護計画（以下、標準看護計画）の使用頻度統計第１位は「転倒・転落リスク状態」であり、診断件数は平成２３年度の２，２０５件から平成２７年度は４，４６６件と倍増していた。また、転倒発生率は１．０２‰であり全国平均と比較し低い。しかし、標準看護計画には、実際に行われている転倒転落予防ケアが不足しており、看護実践に即した標準看護計画とするため、患者目標、看護介入を見直した。

【方法】
１．「転倒・転落」に関する参考文献をもとに患者目標、看護介入を検討した。
２．「転倒・転落リスク状態」の標準看護計画使用頻度統計から自由記載をもとに検討した。
３．A病院医療安全管理部で推奨している転倒・転落予防ケアをもとに検討した。

【結果】
転倒・転落予防では患者、家族が危険因子を意識し、自らが転倒予防行動に参画できるような働きかけが重要と言われている。このことから、転倒・転落に対する看護を転倒回数で評価することは望ましくなく、患者目標の「転倒・転落の発生頻度」を削除した。さらに、患者自らが転倒・転落の危険要因を意識し、予防行動に参画できるよう「援助を求める」「足によくあう靴を使用する」「危険因子を認める」「健康状態の変化を認識する」を追加した。
患者が援助を要請せずに移動する要因に、羞恥心、遠慮、過信、リスクの理解不足が言われている。A病院で使用している転倒・転落アセスメントスコアシートにも、現状のADLの認識がない、援助を受けることに遠慮や抵抗があるという項目が含まれている。羞恥心、遠慮、過信をなくすことは容易ではないが、自分自身にどのようなリスクがあるかを理解すること、その上で予防行動に参画できるよう具体的な看護介入を加えることとした。そのため、「予防行動の方法を説明する」「マップを用いて危険個所の提示と説明をする」「トイレの不安定な戸を支えにしない」「移動時は点滴キャスターや車椅子を杖代わりにしない。補助具の安全な使用を説明する」「転倒転落予防のDVDの視聴を勧める」「一呼吸をおいて、体勢を整えて移動するよう説明する（１．２．３運動）」「排泄の場面では、予定された間隔で誘導、見守り、先取り介入を実施する」という看護介入を追加した。

【まとめ】
患者が安全で安心な入院生活が過ごすためには、患者と看護師が目標を共有し、その目標に向かって患者自身が行動することが不可欠である。今回、患者が転倒・転落予防行動により参画できるように、実際にベッドサイドで実践している転倒・転落予防の患者目標と看護介入を追加した。